

キムサリヤン

金史良の文学—『光の中に』—

ハン グ ヨン
韓 丘 庸

まえがき

今から6年前の1987年3月、朝鮮民主主義人民共和国の芸術出版社から、「金史良作品集」が刊行された。

これは今まで、若干の作品集しか目にしていない者にとっては画期的なものであった。ことに、この作品集の中には、かれが日本で活躍中、芥川賞の候補作にのぼった短編「光の中に」や「土城廊」などの懐しい作品が、逆に朝鮮語に翻訳されて収録されており、的確な評価を得ていることがわかった。

金史良という作家については、日本の若い人たちはさておき、在日朝鮮人をも含めて、今から50年前の1940年頃に日本で活躍した作家であるといえば、あるいは覚えている人もいるかも知れない。

最近、数的にはそれほど多くはないが、南北朝鮮の「分断と統一指向の文学」が盛んに翻訳出版され、日本の読者の目に触れるようになり、これを契機にまた金史良の文学についても改めて理解が深まって行くだらうと思う。

わたしが金史良の作品に接したのは1953年頃だから、今から40年近くも前の話になる。その頃、理論社から出された金達寿・編の「金史良作品集」を書店で目にして非常にびっくりさせられた。在日朝鮮人として、青春時代に素晴らしい文学にめぐり逢えたことを感謝し、幾日も興奮の禁じ得なかったことを覚えている。

いずれにしろ、その後、多くの人々の研究と努力によって、1972、3年頃には、しっかりした「金史良全集」(全4巻)が刊行されたり、今もかれの文学研究にエネルギーを注いでいる東京の安宇植氏の評伝などによって、改めてかれの文学がクローズアップされてきたのを見るにつけ、ますますかれの文学の厳しさと重さに脱帽せざるを得ないのである。

また、在日朝鮮人文学の歴史の中で、より本格的な「在日朝鮮人文学」としての道づくりがなされたその端緒でもあるかれの文学活動は、引き続き現在の在日朝鮮人文学を語るとき、決して無視してはいけない存在でもある。

なぜ、今「金史良」なのかという問いを、もう一度、在日朝鮮人運動の一環としておきかえるとき、別の照射からも新しい「光の中に」向かうかれの文学的偉業と「在日」の今後の生き方がみえてくるのではないだろうか。

I. 今、なぜ再評価か

1945年8月15日、朝鮮が日本の植民地統治から解放されて、今年で46年目を迎えたが、その間には朝鮮では、様々な形で「朝鮮文学史」が改編されたり、書きかえられたりしてきた。しかし、今までの文学史の中での金史良の位置づけは、かれの文学活動が華々しいわりには、決して正確に評価されたとは思わない。

もちろん、わたしたちも日本で文学運動を続けている過程で、共和国の文学事情はそれなり

の資料を入手はしていても、かれの活動の経緯についてはそれでももう一步信憑性に乏しく、具体性に欠けるくらいがあった。

解放まもない1945年から数年のあいだ、「責任ある地位」についていたという話もあるが、それは恐らく当時の「北朝鮮文学芸術家総同盟」の副委員長職にあり、また金日成総合大学でドイツ語の講義を受け持っていたということを指しているのかも知れない。

しかし、数少ない資料の中からその事実を拾うのはむずかしいことであるが、わたしたちが知る範囲では、今回の作品集の刊行以前に、それほど大きく反映された形跡はない。共和国では一時期、かつての日本植民地時代の文学をどう評価するかという原則的な命題から出発せねばならない時期があった。即ち、かれ自身の「出身成分」と、第二次世界大戦中の「親日文学」に向けて、かれがなにをどう標榜したかという問題や、一時的な偽装転向であっても、少なからず日本帝国主義に加担したことによる思想的側面から「変節者」という烙印を押されての厳しい批判と統制の対象にされたことは事実である。

今まで、文学史で消されていた人々が「文学の再構築」のため、改めて名誉が回復されその活動が見直されるとき、その思想的是非がより鮮明になることは自明のことである。

最近発行された「朝鮮文学概観」(全二巻)の中で、ことに朝鮮戦争時の金史良の作品については、「祖国解放戦争の英雄的現実と、人民の崇高な思想美学的要求を反映した」⁽¹⁾すぐれた作品であると、解説している。

いわゆる、「親日文学者」の中でも、民族的抵抗作家にスポットを当てることによって、その肯定的な側面が解放直後の南北混乱期の「空

白時代」を埋めることに役立つならば、それは誰しもが歓迎することであろう。

それがなおのこと金史良の生きざまから「在日」に向けて語られるとき、その問うところの意味は深く、時期的にも的を得ているといえるのではあるまいか。

今、南北統一を目指す人民の闘いは、確実に成果を収めつつある。

一昨年来の朝鮮と日本との国交正常化に向けての新たな進展と、近い将来、南北の文学者が一同に会する「統一指向の文学」をにらみながらの軌道修正であるともいえる。

この作品集においても、その解説の中で評論家の張亨俊^{チャンヒョジュン}は「金史良の半生は短くはあったけれど、かれは偉大なるキム・イルソン元帥と栄光なるわが党の光の中で、永生不滅であり、かれの残した文学は人民を忠誠と偉勲へと導き、わが《主体文学》^{チュチュエムハク}の美しい花園に永遠に咲きほこるであろう」⁽²⁾と過分な評価を下している。

しかし、日本語で書かれたかれの文学が、このように朝鮮作家同盟によって「見直し作業」にとりかかるまでには、それ相当な紆余曲折があったろうことは想像に難くない。それはまさに、これの基本が1939年以降、解放までの日本滞在に極限されており、かれの文学活動の中での青春時代の相剋と挫折の裏返しであったといっても過言ではない。

Ⅱ.「親日文学」の中の苦悩と蹉跎

金史良は1914年、朝鮮の平壤^{ピョナン}で生まれ、本名を時昌^{ジチャン}と呼んだ。

家は両班の出で、文武官を出す旧貴族階級であり、母はアメリカで教育を受けた上流階級の出だといわれている。その上、平壤市内でいく

(1) 朴鐘元『朝鮮文学概観(下)』社会科学出版社、1986年

(2) 張亨俊(音訳)「作家金史良とその文学」『金史良作品集』解説 芸術出版社、1987年

つかの支店を持つデパートを経営していたともいわれたり、ある一説では、小さな鋳物工場を営んでいる家庭に生まれたともいわれており、裕福な家庭であった。

いずれにしろ、敬虔なキリスト教信者の一家であったことは間違いない。

かれは1928年(昭3)平壤高等普通学校(旧制中学)の出身であるが、五年生の時に、日本人の教官である配属将校の排斥運動を起こした主謀者として退学処分を受けている。

ことに、翌年の1929年には、例の「光州学生事件」が起こり、いたるところで日本人学生と朝鮮人学生の衝突が後をたたず、やがて朝鮮全土に日本帝国主義抗争へと燃えひろがったのである。

かれがこの事件に触発されて、一層、「日帝」に対する民族的義憤を強く心に刻みつけるようになったのは当然のことであろう。

その頃のかれのエピソードについては、1954年の「金史良作品集」の解説で、かれと交遊のあった金達寿がよく話しているし、安宇植の「評伝・金史良」の中でも、いくども語られている。

その足で金史良は中国行きやアメリカ行きを模索していたが、結局、京都帝大に席を置いていた兄のはからいで、うまく日本に渡り、九州の佐賀高等学校の文科乙類を経て東京帝国大学

にすすみ、独文科を卒業した。

学生時代からドイツ語が堪能であったといわれており、解放後、金日成総合大学でドイツ語を担当したこともうなずける。

1936年、東大でかれは、佐賀高校時代からの同僚、鶴丸辰雄、新谷俊郎らと同人誌「堤防」を発行した。これは当時「荒れすさぶファシズムの波を食い止めようという意図」⁽³⁾から出たもののようであった。

金史良はここに処女作「土城廊」^{トッラング}を掲載している。

この作品は、かれが高校二年のときに書いたものを、東京にでてきて改作したもので自分では処女作だといっている。その後好評を博し、脚本にして「朝鮮芸術座」で公演したりしている。

「土城廊」については張亨俊が次のように述べている。

「作家はこの作品で、日帝の植民地統治によって生地獄と化した1930年代中葉の朝鮮の現実を、平壤土城廊に住む人びとの悲惨な生活、かれら最下層民の悲劇的な運命を通してよく描いてみせた……(中略)……貧困で、抑圧され、虐待されたあげく死に追いやられるかれらの運命はいかに不憫でやりきれないことだろうか」⁽⁴⁾といっているように、民族的なうらみつ

작가는 이 작품에서 일제의 식민지통치에 의하여 생지옥으로 화한 1930년대중엽의 조선현실을 평양토성랑인민들의 비참한 생활, 그들 최하층의 비극적인 운명을 통하여 잘 보여주었다. --- (중략) ---

혈빛고 짓눌리고 친대받다가 이레 죽고 지레 죽는 이들의 운명은 그 얼마나 애처롭고 불쌍한가.

(3)金達寿「金史良・人と作品」『金史良作品集』理論社、1954年

(4)註(2)に同じ

らみと、「滅ぶものへの哀愁」そして、当該「社会に対する激しい怒り」と意欲を反映して、あれから57年経過した今日においても、読者に強烈な印象を与える遜色のない説得力ある作品となっている。

その後、かれは張赫宙^{チャンヒョクテウ}の紹介で保高德蔵の主催する「文芸首都」の同人になり、その年1939年2月号に掲載した「光の中に」が芥川賞の候補作になるや、かれの名は一躍日本の文壇に知れるようになった。当時25歳であった。

1936年8月以降、南次郎の朝鮮総督就任とあいまって、朝鮮における植民地統治は一段とその厳しさを増し、1937年4月から、中等学校における朝鮮語教育は全面的に禁止されてしまった。

こうした情勢は「香山光郎」こと李光洙^{イグァンヌ}や「青木洪」こと洪鐘羽^{ホンジュンウ}、「牧洋」こと李石蕙^{イソクワン}などの日本語による作品活動を活発化させただけでなく、菊池寛の肝入りでつくられたモダン日本社は「朝鮮芸術賞」まで制定し、その文学部門の選考を「芥川賞委員会ニ委嘱ス」と決めたのである。

この賞の受賞者には、李光洙^{イグァンヌ}、李泰俊^{イナム}、李無影^{ユン}といった親日文学者で、当時の朝鮮の錚々たるメンバーがそろっていた。

第一回目の李光洙の受賞について、菊池寛はこう語っている。

「『モダン日本』の馬海松^{マヘッソン}君から頼まれて、朝鮮芸術賞の資金を出すことにしたが、その第一回が、今度朝鮮の第一流作家李光洙氏に贈与せられる事になった。この人は朝鮮人が日本姓を名乗ることになった時、直ちに香山光郎と改姓したとのことである。三月中に東京に来てもらって、日本の文壇へも紹介したいと思っている。」⁽⁵⁾

李光洙は、日本の植民地政策のひとつとして強行した朝鮮人民からの母国語抹殺、創氏改名政策に積極的に参与し、朝鮮文学にたいする態度も「民族を排斥し、自国の民族に劣等感を植えつける以外のなにもの」⁽⁶⁾でもなかったのである。

この頃から、日本の文学界には朝鮮文学の進出が目立ってきた。

朝鮮文学作品の翻訳が盛んになる一方（そのほとんどは「自作自訳」であったが）、「モダン日本」朝鮮版という臨時増刊号まで刊行して、多くの朝鮮人作家が名を連ねたり、「新潮」や「文芸」がこぞって「内鮮一体」を目指した翻訳紹介の必要性を叫んだ。

林房雄などは、
「私は内地語論者で、朝鮮の作家が全部内地語で書く日の来ることを望んでいるが、性急にそれを主張することはやめる。遠き将来でかまわないのだ。（略）日本は朝鮮の征服者ではない。朝鮮の精神と文化の伝統を正しく強く生かす方向に言語問題も解決されねばならない」⁽⁷⁾

などと、植民地統治者として「寛大なる」奢りで昂然とうそぶいた。

こうした状況の中で親日文学者はますますエスカレートしていき、洪鐘羽の「養い嫁」^{ミインメマリ}、金聖珉^{カム}の「神武東征記」、張赫宙の「加藤清正」などが絶賛をあびた。

そうして、当時の「朝鮮文人協会」は、やがて国民精神総動員朝鮮聯盟への加入を目的として、「朝鮮文人報国会」と改編され、250名に及ぶ「内鮮文士」が集まり、李光洙を初代会長に指名した。

この大会では、辛島驍、津田剛、杉本長夫、金東煥^{カムドンファン}、朴英熙^{パクヨンフィ}、簾想涉^{ロンサンソプ}、金東仁^{カムドンイン}、張赫宙が幹事に選出され、「内鮮一体論」を花咲かせつつ、

(5) 菊池寛『話の肩籠と半自叙伝』1940年

(6) 麗水「芥川賞にかかわった戦前の朝鮮植民地文学」『長周新聞』'91年5月21日付

(7) 林房雄『朝鮮の精神』『文芸』1940年7月号

いよいよ国家的転落を確かなものにしていったのである。

朝鮮語で書かれる作品までも「日本の国民文学の範疇に繰り込み」⁽⁸⁾ながら、国家的権力でねじ伏せていったのである。

しかし、こうした日本の強権の迫害の中にあっても、金史良は大いなる抵抗を試みた。まず、その主たるところは、

- ①朝鮮語をまもること、
- ②芸術性をまもること、
- ③合理精神を主軸にすること、

であった。

これはとりも直さず、朝鮮民族の主体性を堅持しようと試みた証左であり、日帝迎合の他の文学者と対峙するとき、たしかに「板垣直子のいうように《金史良だけは一人異っている。》彼には単なる写実以上のものが内にある。他の人達にない烈しい内面性、近代的な着眼点」⁽⁹⁾があるという指摘も的を得ているといえるだろう。

やがて「東亜作家聯盟」や「大陸文学報国会」の準備に向かって、朝鮮のインテリに一層の拍車がかけられたのである。

Ⅲ. 「光の中に」から祖国朝鮮へ

ひとりの朝鮮人作家としての金史良が、日本の植民地統治下にあった当時の朝鮮の文化状況を凝視しながら大きな憤りを感じたのは当然のことである。

「民族の良心」に忠実であったカップ文学(朝鮮プロレタリア芸術家同盟)の李箕永をはじめ、呉相淳、尹東柱、李陸史など、多くの作家が日本語で創作することを拒否して筆を折ったのに反して、李光洙や李泰俊、金東仁などの文学者は、いわゆる「内鮮一体」を目指して「日本人

よりも、より日本人たり得よう」と、積極的に日本語による「日本帝国主義」讃美の作品を書いたり、「聖戦」であるべき太平洋戦争にこぞって参与することが朝鮮民族としての最大の責務であり、「皇国臣民」たり得ると鼓吹してやまなかったのである。

金史良は、朝鮮を侵略した日本帝国主義だけでなく、こうした「親日文学者」の妄動にすら激しい怒りをもちながら、精一杯の抵抗を続けたのであった。

1940年、第10回の芥川賞の上半期は、寒川光太郎の「密猟者」と、金史良の「光の中に」の二作が候補作としてしぼられ、最終的には寒川光太郎が受賞することになった。

この「光の中に」は、まさに、朝鮮人作家の作品が候補に上ったという単にその事実だけではなく、ひいては、朝鮮民族が日本人の「同化」政策にどう対決していくかを、在日朝鮮人のさまざまな歪みや日常の悲劇を通して描いている点でも、大きな警鐘にもなったのである。

朝鮮人の主人公「私」(南先生)は、S大学協会というセツルメントで、夜間の英語教師として働いていた。

そこで、父親が日本人で、母親が朝鮮人である「山田春雄」という少年と知り合う。かれはいじけていて、うじうじと暗い。

少年の父親、半兵衛もまた朝鮮人を母に持つハーフである。

春雄の母親・貞順は、「州崎の料理屋」にいた自分を借金を払って身受けして自由にしてくれたこと、朝鮮人である自分を妻にしてくれたこと、理由から、半兵衛に感謝の念をいだいており、半兵衛の粗放な仕打ちや虐待をもじっとこらえている。

春雄のしめっぽい暗い性格は、両親の分裂の

(8) 安宇植『評伝・金史良』草風館、1983年

(9) 朴春日『近代日本文学における朝鮮像』未来社、1969年

はざまで、どちらからも「愛情」を注いでもらえない環境に起因する。

春雄が「私」に対して執拗につきまったり、「反抗」したりするのは、朝鮮の母の延長で「私」に愛を語り、求めているのである。

半兵衛の暴力によって負傷し、入院した母を「私」と一緒に見舞った春雄は、その帰り途で「私」に向かって、「南先生（^{ナン}南ではなく）でしよう」と明るく笑ってみせた。

金史良はこの「光の中に」を通して、朝鮮と日本とのこのような不幸なかかわりが、個々の人間生活をいかに破壊し、人間性を蝕んでいくかを、この春雄少年と母親・貞順との葛藤の中で見せてくれる。

このように「光の中に」は「一人の少年を軸にして、少年の両親と『私』の中の民族問題を冷徹な目で追求し、対等でない民族間における個々人の結びつきの複雑さや、他民族を『同化』することの非人間性をあきらかにした」⁽¹⁰⁾のものであると同時に、この作品が「日本の文学者たちに、植民地朝鮮が日本の恥部であることをあらためて深く思い知らせた」⁽¹¹⁾ことと思う。

なお、わたしたちは、この現実が決して遠い過去のものではなく、解放後50年経た現在も、日本の植民地統治の「ありがたき所産」として、しっかりと在日朝鮮人社会に受け継がれていることを知っている。

かれの作品に対して、選者の一人である久米正雄は「国家的な重大性を持つ作品であり、文章もまた東京文壇の一般水準におとらない」⁽¹²⁾と大きな讃辞を与え、同じく佐藤春雄も選評で「金史良君の私小説のうちに、民族の悲痛な運命を存分に織り込んで、私小説を一種の社会小説までにした手柄と稚拙ながらもいい味のある

筆致もなかなか捨て難いものを感じた」と指摘している。

金史良は「光の中に」を書いて登場するや、まさに堰を切ったように、「草深し」「泥棒」（「文芸」）、「無窮一家」（「改造」）、「天馬」「郷愁」（「文芸春秋」）、「光冥」（「文学界」）、「親方コブセ」（「新潮」）と、次々と作品を発表し続けた。

まさにこれは、「危険な状況におかれてなお、ぎりぎりの限界に迫いつめられるまで」民族的立場を堅持しようとする基本姿勢であり、どの作品を読んでも、「闇の中に体をちぢめて目を光らせた」作者の緊迫感と悲愴感が伝わってくる。

かれは鎌倉の米新亭という小さな旅館の離れを借りて、創作に専念していたが、遂に1941年鎌倉警察署に検挙された。

保高德蔵は久米正雄や島木健作などの力を借りて、金史良を鎌倉署から釈放するのに努力を惜しまなかった。

金史良は釈放されると、その足でまっすぐ朝鮮に帰って行った。

そうして、1943年（S.18）京城で発行されていた「国民文学」という日本語雑誌に歴史小説「太白山脈」を書き、まもなく朝鮮総督府の機関誌として残されていた唯一の朝鮮語新聞の毎日新報に、佐世保海軍兵学校の参観ルポ「海軍行」と、「海への歌」を連載した。この作品は題名通り、「海軍特別志願兵制」実施により、朝鮮人への海軍思想を注入するための、大日本帝国海軍の宣伝小説である。

このことについて金達寿は、「金史良がそういう雑誌や新聞に作品を発表することが、決いていい気持ちでなかったことはたしかであった。何かみじめな感じであった。私は当時京城日報の記者をしていたのであるが、彼も同じよ

(10)任展慧「プロレタリア文化運動ものがたり——在日朝鮮人作家の作品(7)」『読書の友』1968年4月22日付

(11)註(10)に同じ

(12)金鍾国『親日文学論』高麗書林、1976年

(13)註(3)に同じ

うにその汚れに染まってゆくのかと思われた」⁽¹³⁾と述懐している。

その後、かれはこの「海への歌」を契機に、朝鮮軍の報道班員になることができ、「皇軍慰問」に名を借りて、見事中国大陆へ渡ることに成功したのである。そして、当時の八路軍に付属している朝鮮義勇軍の従軍記者として参加することができた。

ただ、かれにとって「海への歌」は一体何だったのだろうか。単に延安脱出への偽装工作だったにしても、一時的な思想遍歴が、今までの「ぎりぎりの限界に追いつめられるまで闘った」果敢な抵抗精神との帳消しで許されるものだろうか。支払われるその代償はあまりにも大きいものがある。

Ⅳ. 従軍記録「海が見える」

1945年8月15日、第二次世界大戦の終結と同時に金史良は平壤に帰り、国立劇場や国立演劇学校で、かれが中国の塹壕の中で書いたといわれる戯曲などを整理して上演したりしていた。

そのかたわら、当時の「北朝鮮文学芸術家総

同盟」の副委員長職をつとめながら、次々と新しい作品を発表した。

戯曲には「ドボンとバボン」(「文化朝鮮」第1集～第3集)、「ポットリの軍服」(「民主朝鮮」'47.1月号)、その他「地熱」とか、キムイルソン將軍の抗日パルチザン闘争を扱った「雷雨」などがあり、小説では「チャドルの汽車」「風塵」「驢馬千里」「E記者」「南からきた手紙」などがある。

これを見た限りにおいても、劇作家としても優れた才能を発揮していたということがわかるのである。

1950年6月25日、朝鮮戦争(共和国では、「祖国解放戦争」とよんでいる)が始まると同時に、金史良は従軍作家として人民軍と共に南へ下っていった。

その従軍記「海が見える」は、当時の「戦線文庫」の中で刊行され、多くの人々に愛読されたのである。

今回新たに刊行された「金史良作品集」には、「ソウルから水原へ」「われわれはこのように勝った」「洛東江畔の塹壕の中で」「海が見える」の四編が収録されており、戦争記録文学として

동무들 돌격앞으로 !!

우리들은 고기비늘같은 만신의 상처들을 더듬으며 거인
과도 같이 산악에서 내려가리라 !

올림프스산을 내려가는 제우스처럼 만천하에 빛을 뿌리
며 거동하리라 !

오각별 삼색기 펄럭이며 위대한 령수노래부르며 바다를
향하여 전진하리라 !

바다가 보인다. 기제도가 보인다.

바로 여기가 남해바다이다.

非常に芸術性の高い優れた作品となっている。

同務たちよ突撃、前へ！

われわれは魚のうろこのような満身の傷あとをまさぐりながら、巨人のようにこの山嶽からおりてゆくであろう！

オリムポスの山をおりてゆくゼウスのように、満天下に光をふりまきながら行動するであろう！五角星三色旗（共和国旗）をなびかせて、偉大なる首領の歌をうたいながら海へ向かって前進するであろう！

海がみえる。巨済島がみえる。

まさしくここが南の海なのだ。⁽¹⁴⁾

最も苛烈をきわめた太田^{タツワン}の中部戦線および市街戦を有利にすすめて、南下してきた人民軍の闘いに声援をおくるかれが「遂に南の海をのぞむところまで、祖国の運命を銃とペンでかけるその魂の深淵には、なにが去来しただろうか。全土の九割を解放した人民軍と共に南の海を望む。その感慨——空の星をのぞんで『ああ、海が見える！ 海が見える！』と感嘆する作者の胸には祖国の輝かしい未来がえがかれていたに違いない」⁽¹⁵⁾

それからまもなく1950年9月15日、アメリカ軍の仁川上陸によって、人民軍が第一次撤退を余儀なくされたとき、金史良は戦死したと伝えられる。

祖国が日本帝国主義の植民地から解放されて、わずか5年余りにしかならない。36歳であった。

この戦死については、「新日本文学」が1952年12月号で、保高德蔵、村上知義、間宮茂輔、金達寿等が追悼の特集を編んでいる。

ただし、かれの死については、第一次撤退時に持病の心臓病が悪化し、人民軍に従って撤退

できず、^{フアンジュ}原州の8キロ手前の南漢江のほとりで息を引きとったともいわれているし、また、撤退時にB 29の爆撃にあってなくなったとも、手榴弾で自爆したともいわれているが、真相はさだかでない。

いずれにしろ、「かつて、日本の植民地統治下にあつては、ひたすらに民族の解放と祖国の独立とを願い、『光の中に』出て行くため、中国の大地をさまよい、ようやく太行山寨の抗日陣営に身を投じた金史良であつた。それこそ苦悩をつきぬけて歓喜をかちえたのであつた。そのかれが、解放された祖国の主権と民族の自由をまもるための侵略者との戦いにおいて斃れたという事実は、まさに抵抗の作家にふさわしい死」⁽¹⁶⁾であつたといふことができる。

あとがき

—在日朝鮮人文学の課題にかえて—

以上、前述した如く、金史良は抵抗の作家として、日本に彗星のようにあらわれ、二年余りの活動の後、姿を消し、また解放後は五年余りの共和国での活動を最後に短い生涯を閉じた。

かれがなくなってなお、四十四年を経た今日でも、かれの作品が問い直されることは、日本文学に見られない異質なものでありながらも、「棄てることのできない文学」として、日本文学に向けて十分な説得力を持つからだと思う。

また、芥川賞候補にのぼったことの一つのきっかけから、「在日朝鮮人文学」の本格的な位置づけと、その定義を求めたことへの影響も見逃せない。

現在、その延長線上に、芥川賞の候補にのぼった金達寿（「朴達の裁判」）があり、芥川賞を受賞した李恢成（「砧打つ女」）、^{リ・カイ・セイ}李良枝（「由熙」）

(14)金史良「海が見える」『金史良作品集』収録、313ページ

(15)韓丘庸「祖国解放戦争と朝鮮児童文学」『日本児童文学』1965年8月号

(16)安宇植『金史良——その抵抗と生涯——』岩波新書、1972年

がいる。また大佛次郎賞を受賞した金石範（「火山島」）の存在も大きい。

しかし、新しくは直木賞作家の「つかこうへい」こと金峰雄や、中央公論文学新人賞の「西本陽子」こと金陽子や「香山純」こと朴純、評論家の「竹田青嗣」こと姜修次など、本名を名のらず創作活動が続けている「新世代」が、果たしてどこまで「在日朝鮮人文学」たりうるかという新しい定義の問題も起きている。

より民族的で、より強烈なアイデンティティを固執するがために「在日朝鮮人文学はあまりにも民族性と政治性が強く、普遍性に欠ける」とか、「朝鮮がテーマでは普遍性がない」とまでいわれながらも、なおかつ、果敢に「民族」を全面に押し出していた時代は、在日朝鮮人文学特有の強烈な香りと臭いがあつた。

それは、日本の文学者の一部の人々の「文学的大国主義」に抗して自らの独自性の確立に向かって闘った朝鮮人作家たちの成果によるものであろう。

その定義が今、世代の交替によって、確実にくずれつつあり、「在日文学」の新しい有り態と「負の世界」への埋没意識が問われている。

また一方では、解放後今日まで、常に「民族の主体性」を堅持しながら一貫して朝鮮語による創作が続けている在日本朝鮮文学芸術家同盟

の文学集団も海外僑胞文学としての「在日朝鮮人文学」運動に大きく寄与していることも事実である。

新世代の登場で、その書き手の人生観や世界観、哲学観すらも封じ込みつつ、民族性が喪失されて行く昨今、「金史良の文学」はもう一度わたしたちに「民族」を厳しく指摘し問い正してくれるのではないだろうか。

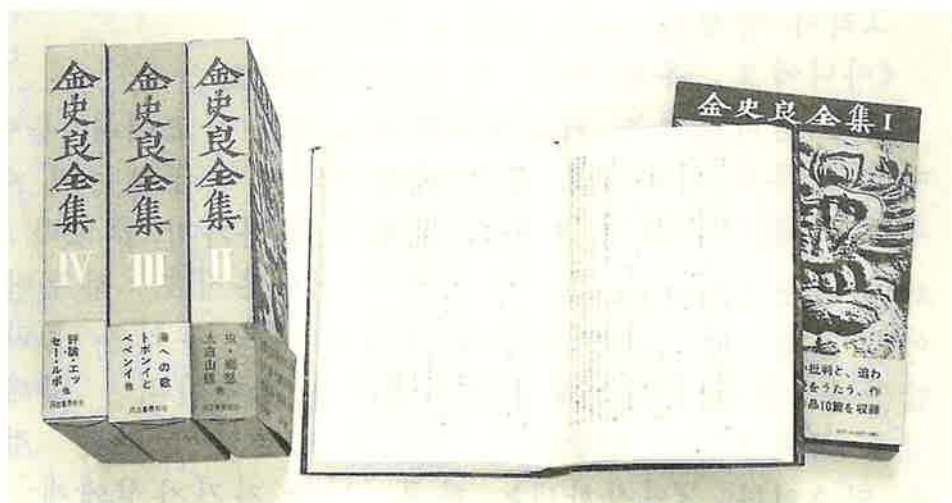
朝鮮と日本との国交正常化が叫ばれながらも、そのかたほうで、在日朝鮮人に対する偏見と差別は旧態依然として後をたたず、日本人の朝鮮に対する見方にはまだまだ問題が多い。在日朝鮮人の法的地位の問題をはじめ、民族教育の問題、指紋押捺の問題、企業権確立の問題などさまざまな民族権利を擁護する問題は、常に「在日朝鮮人」の生きる権利としての緊要な問題となり、ことあるごとに、日本人との摩擦は今も絶えない。

今まで、長い間目に触れなかった作品を網羅して、朝鮮民主主義人民共和国が「金史良作品集」を刊行し、詳細にわたって再評価したことは、歴史的にも深い意味を持つばかりでなく、その問うところの意義は大きい。

ともあれ、朝鮮戦争で祖国は素晴らしい書き手を失ったのである。今も惜しまれてならない。

参考資料

- (1)『金史良全集』全四巻、金史良全集刊行委員会・河出書房新社 1973年
- (2)巖崎石・他『解放後10年間の朝鮮文学』朝鮮作家同盟出版社、1955年
- (3)金民「戦後の朝鮮文学——第二回作家大会を中心として——」朝鮮問題研究No.1 1957年3月号
- (4)金石範『民族・ことば・文学』創樹社、1976年
- (5)韓丘庸「在日朝鮮人文学の中の児童文学年譜」『児童文学と朝鮮』神戸青年学生センター、1989年
- (6)安宇植訳『鷲馬萬里』朝日新聞社、1972年
- (7)任展慧「張赫宙論——1945年以前の在日朝鮮人文学関係年表——」『文学』1965年11月号
- (8)『朝鮮文学通史上・下』科学院出版社、ピョンヤン 1959年
- (9)磯貝治良『始源の光——在日朝鮮人文学論——』創樹社、1979年
- (10)丁英鎮『痛恨の失踪文人』ソウル文二堂、1989年
- (11)金允植『解放空間の文学と文学の実現認識』図書出版ハンウル、1989年
- (12)林浩治『在日朝鮮人日本語文学論』新幹社、1991年



내가 이야기하려고 하는 아마다하루오는 실로 이상한 아이였다. 그는 다른 아이들속에 휩쓸리지 못하고 언제나 그주위에서 소심하게 어물거리고있었다. 노상 얻어맞기도 하고 수모를 당했으나 저도 처녀아이들이나 자기보다 어린 아이들을 못살게 굴었다. 그리고 누가 자빠지길라도 하면 기다리고있은듯이 야야 하고 떠들어댔다. 그는 사랑하려고 하지 않았으며 또 사랑받으려고도 하지 않았다. 보기에 머리숱이 적은편이고 키가 컸으며 눈은 약간 흰자위가 많아서 좀 기분이 나쁘다. 그는 이 지역에 사는 그 어느 아이보다 옷이 어지러웠으며 벌써 가을이 깊었는데도 아직 해어진 회색옷을 입고있었다. 그때문인지는 모르지만 그의 눈은 한층 더 음울하고 회의적으로 보인다. 그런데 이상하게도 그는 자기가 사는 곳을 절대로 대주지 않았다. 그가 걸어오는 방향을 보면 아마 정거장뒤에 있는 진펄근처에서 살고있는것 같았다. 그래서 언젠가 나는 이렇게 물었다.

《정거장뒤에서 사느냐?》

그러자 당황한 그는 머리를 저었다.

《아니예요. 우리 집은 협회옆에 있어요.》

물론 엉터리없는 거짓말이었다. 그는 학교에서 돌아올 때면 일부러 이쪽으로 길을 에돌아와서 놀곤했는데 야간부에서 공부가 끝날 때까지 절대로 돌아가지 않았다. 듣자니 식모할머니의 방에서 밥을 얻어먹은적도 한두번만 아닌 모양이다. 나는 처음에 그에게 별로 주의를 돌리지 않았다. 그러나 어느날밤 어두운근처 할머니의 방에서 밥을 퍼먹고있는 모습을 보았을 때는 깜짝 놀라서 걸음을 멈추었다. 《이상한데》 하고 나는 자기자신에게 말

했다. 그러나 어떤 의미로 그렇게 말했는지 명확하지는 않았다. 나는 다시한번 《이상한데.》하고 중얼거렸다. 그의 모습이 어쩐지 나와 관계가 있는것 같았지만 좀처럼 생각나지 않았다. 움츠러들어 구부정한 잔등이며 얼굴과 입모습, 저가락을 쥐는것까지. 마지막에는 내가 숨이 막힐것 같아서 묵묵히 그의 곁을 떠나고말았다. 하지만 그후에 나는 별로 그를 생각하지 않았다. 그런중에 그와 나사이에 는 참으로 기묘한 한가지 사건이 일어났다...

그무렵 나는 이 S대학협회의 기숙인이었다. 나의 일이란 그곳 시민교육부에서 밤에 두시간정도 영어를 가르치면 되는것이였다. 그래도 교또(강동) 가까운 공장거리여서 배우러 오는 사람이 근로자들인것만큼 두시간 수업이지만 힘이 들었다. 낮동안 일을 해서 지칠대로 지친 그들인지라 이쪽에서 여간 긴장해서 접어들지 않는 한 모두 끄덕끄덕 졸아버리기때문이였다.

야간부에서 기운찬것은 역시 아이들이였다. 우리 교실의 바로 아래층이 아이들의 교양실이였으므로 언제나 그들이 떠들어대는 소란한 소리가 들려왔다. 나의 학생들은 그 소리에 놀라 엉치를 들다가 다시 앉는 형편이였다. 낡은 피아노가 울리기 시작하면 아이들은 일제히 《우리들은 씩씩하게 자라나지요》라는 노래를 지붕이 날아날 정도로 기운차게 목청껏 불렀다.

(이젠 시간이 되였구나.) 하고 생각하기가 바쁘게 이번에는 매들로 콩을 가는것처럼 소란해진다.

※「金史良作品集」(1987)의「光の中に」の冒頭